

## IV タカサゴ類標識放流試験

はじめに

本部町のグルクン追込網漁業は30名前後からなる1統が着業しており周年操業で、昭和50年は110トン(106日操業)の漁場は本部地先を中心に沖縄本島北端から西沿岸一帯、慶良間諸島沿岸域と広範囲にわたっている。

タカサゴ類の漁獲量は年間196~472トンで近年漸増しており沿岸漁業対象魚種としてはたい類はた類について主要な地位を占めている。またタカサゴ類幼魚(体長5~10cm)はカツオ餌料魚として宮古、八重山地域で年変動はあるが年間20~25トン程度採捕されている。

このように各面の利用状況と概存及び未利用の漁場面積が約5,000 $\text{km}^2$ と試算されることから沖縄県沿岸域において余力のある潜在資源として注目されること、追込漁法の特性から乱獲に陥り易い漁業資源であることからタカサゴ類の資源生態面の調査研究が必要であろうと思われる。

当水試において昭和47年以降“沖縄周辺重要水産資源調査”の対象魚種として取りあげ漁獲量、魚体精密測定調査を継続しているが今回の試験はタカサゴ類の移動、成長度等の生態面の調査もさることながら沖縄沿岸性浮魚類の標識放流は初の試みであるため標識の可否、方法、標識魚の生残率等の検討も含めて行うことを目的とした。

今回の試験の実施にあたり多大の便宜とご協力を賜った本部漁業協同組合、本部町役場水産係、供試魚の採捕と漁獲物の生簀移し換え作業にあたった追込漁業本部町浜崎仲村組(代表渡久地政盛)に深謝するとともに長時間にわたる標着及び放流作業に協力いただいた本場調査船くろしお(21.44トン)乗組員一同に厚くお礼申しあげる。

### 1 標識票の種類と付票部位

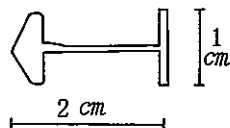
標識票には矢型、迷子札型、スパゲティ型、アンカータッド等があるが魚体の大きさ、遊泳力を勘案してタカサゴ類にはサバの標識放流試験に用いて好成績をあげているアンカータッドを使用した。アンカータッドはプラスチック製で下地は黄色で数字を黒色で記入してある。

付票は第1背ビレ基部前部にタギング・ガンによって行った。

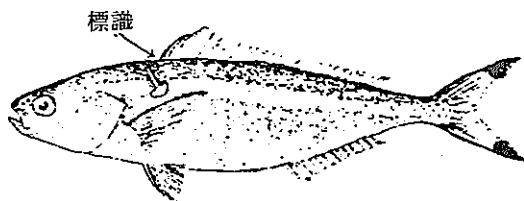
### 2 実施概要

昭和51年2月17日にタカサゴ類の漁獲及び標識放流を実施した。漁獲位置を第3図に示した。

1回目の漁獲場所は面那島北300mにある中ノ瀬水深10-30mで10時30分にタカサ



第1図 標識票



第2図 付票部位

ゴ約100尾を漁獲し竹まる籠(1.2トン容量)に収容した。2回目は面那島北側沿岸のリーフ縁域10~30mで12時30分にニセタカサゴ、クマササハナムロ等約2500尾を漁獲し竹まる籠2ヶに分けて収容した。収容後漁獲場所は水深が浅くリーフ縁域であるため2ヶの竹まる籠を調査船くろしおで曳航し水深39mの瀬底島寄りの位置で本船をアンカー固定し標着及び放流作業を行った。

#### ○放流方法及び順序

漁獲→竹まる籠収容→本船上パンライト水槽に20尾づつ移し供試魚を麻醉→アンカータグを背びれ前部

に標着→舷側の網生簀(1.5×1.5×1.5m)に収容→放流

○麻醉方法：供試魚を麻醉薬MS-222の1PPm溶液に1~3分間浸漬した。1~2分で麻醉が効く。網生簀の海水に戻した後2~3分で回復がみられた。

供試魚を慣らすため竹まる籠に2時間30分収容した後、16時に標着作業を開始し途中1時間の休息をはさんで23時30分に終了した。

網生簀から標識魚の放流は当初網を傾斜させてする予定だったが潮流が強く網が潮に吹かれ、傾斜させることができないため生簀底部を切り裂いて放流した。放流は2回に分けて行い、1回目は19時45分に、2回目は23時45分にそれぞれ行った。

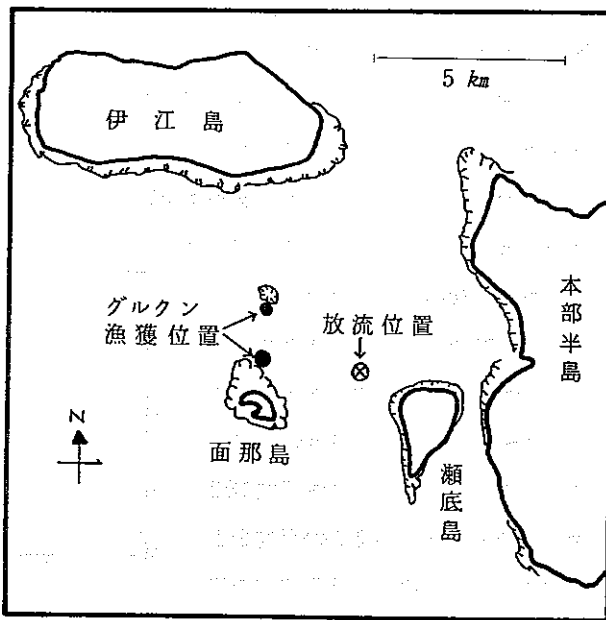
#### ○有効放流尾数と所要時間

所要時間は放流後の大きさ、標識票の種類、作業人員、放流技術の熟練度によるが標着開始時間から放流完了時間までを所要時間とすると今回は休息時間を除くと6時間45分要した。放流尾数は2,020尾であるため有効放流尾数は1人1時間当たり298尾となる。サバ類でアンカータグ使用の場合1人1時間当400~500尾の標着放流が可能との報告がある。

タカサゴ類では作業中鱗の脱落がよくみられ活力低下の危険性が大きいことから1回当りの麻醉尾数を10尾以内としかつ水槽の海水をできるだけ清澄に保つ必要がある。したがってタカサゴ類では1人1時間当150尾~200尾程度が妥当と思われる。

### 3 放流魚について

今回の放流魚の魚種組成は次のとおりである。



第3図 漁獲位置及放流位置

和名	方言名	放流尾数	%
ニセタカサゴ	(ボームレージ)	1,377尾	68.2%
タカサゴ	(カブクッーグルクン)	344	16.5
ユメウメイロ	(シチュウグルクン)	135	6.7
クマササハナムロ	(ウクーグルクン)	103	5.1
ササムロ	(ヒラーグルクン)	71	3.5

放流魚の体長はニセタカサゴ16  
 ～21cm平均18.4cm、タカサゴ21  
 ～25cm平均22.9cm、ユメウメイ  
 ロ14～21cm平均16.8cm、クマ  
 ササハナムロ15～23cm平均18.2  
 cm、ササムロ21～25cm平均24.1  
 cmであった。放流魚の体長組成を第  
 4図に示した。

今回のグルクン追込2回操業の漁  
 獲物組成はタカサゴ類80%スズメ  
 ダイ類ブダイ類その他が20%であ  
 る。上記の放流魚の組成が漁獲され  
 たタカサゴ類の内訳となる。

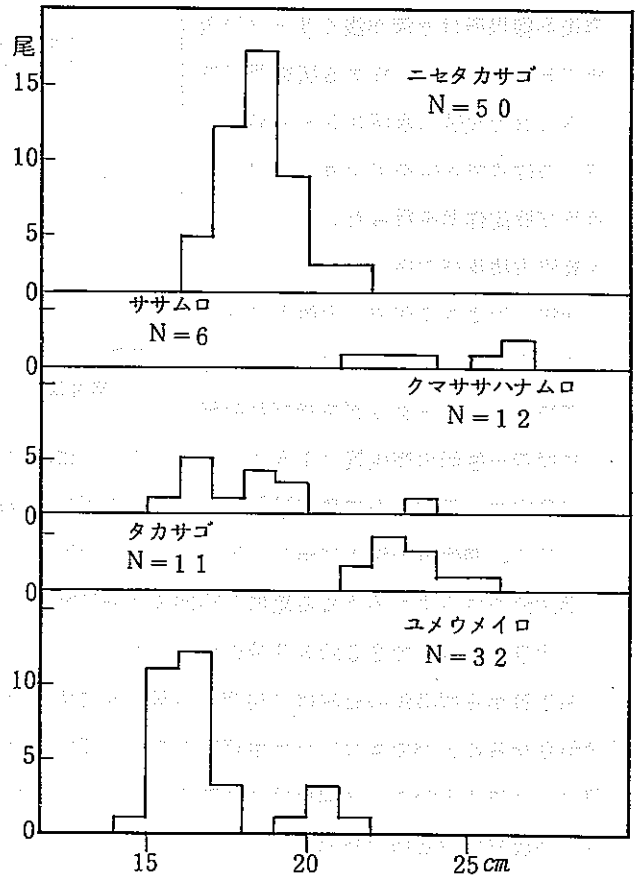
グルクン追込網による漁獲物組成  
 は地域、季節により異なるが、昭和  
 50年1月～12月県漁連市場に水  
 揚されたのはタカサゴ類79.2%で  
 残りはスズメダイ類4.7%アジ類  
 3.3%ベラ類2.7%ニザダイ類0.7  
 %その他9.4%であった。

尚、放流魚の熟度指数はササムロを除き4魚種とも低く生殖腺は未熟状態であった。

昭和51年8月現在再捕報告は未だ得られていない。(文責 友利)

#### 参考資料及文献

1. 沖縄水試：昭和49年度沖縄周辺重要水産資源調査結果報告書
2. " : 昭和50年 " "
3. 大川 浩：1975：東シナ海および日本海南西海域における大中型まき網の漁獲物による標識放流結果について-I マサバの標識放流について 西水研報(47)15～50



第4図 タカサゴ類放流魚の体長組成 (F. l)  
 N: 測定尾数